高齢者シェアードリビングにおける共同居住と空間要求に関する研究

ワークショップによる理想の暮らしからみる可能性

A STUDY OF THE COLLABORATIVE LIFE AND THE SPACE DEMAND FOR THE SILVER SHEARED LIVING

The possibility from the ideal life by the workshops

徳尾野 徹 — * 1 横山俊祐 — * 2

キーワード:

高齢者の住まい, 高齢者シェアードリビング, ワークショップ, 共同居住, 地域包括ケアシステム

Keywords:

Elderly houses, Silver sheared living, Workshop, Collaborative life, Community based integrated care system

Tetsu TOKUONO — * 1 Shunsuke YOKOYAMA — * 2

“Silver Sheared Living (SSL)” is one of the new choices of the dwellings at home for the independent old man who wants to continue living individually in his local community with his friends. SSL is located on the centre of private house and elderly apartment house. On this study, the ideal images, the problems for realization and the importance as a dwelling of SSL were defined through the workshops with the old men and women. For elderly people that want both to save their privacies and to hinder the isolations, SSL has the possibilities as the elderly houses after this.

1. はじめに

団塊世代の高齢化が進行し、介護付や住宅型の有料老人ホーム等の施設不足が深刻化している。それに呼応し、定着しつつある小規模多機能型居宅介護サービスや今後展開される地域包括ケアシステム等、在宅を前提とした介護施策が普及し出している。自宅での最期を希望する高齢者も 55%と半数を超える(「高齢者の健康に関する意識調査」内閣府・2012 年)。一方、高齢者が独居となっても、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けるには「自宅」しかなく、それ以外は制度に則った高齢者向け住宅(住宅型有料老人ホーム等)となる。そこでは、運営者の管理のもとで安全安心の暮らしを獲得できるが、自分のことは自分で決める「自分らしい暮らし」とは言い難い。また、自宅での生活よりも入居費を含めた経費は増大し、住み慣れた地域との縁も切れる。自立高齢者の共生を理念とした高齢者グループリビングもみられるが、やはり運営者の管理のものと共同居住であり、「自分らしい暮らし」には限界がある。高齢者が安心して住み慣れた地域で暮らし続けるには、地域における在宅居住の選択肢を拡張する必要がある。本研究では、その一つとして高齢者シェアードリビング(以下、SSL)の可能性を検討する。SSLとは、本研究では「複数の高齢者が、血縁に関係なく住宅を選択・共有し(賃借含む)、各個人の生活を尊重しながらも、身体機能の低下や独居の孤独感などの生活上の支障を補い合う共同居住」と定義する。自助・互助を前提とした、気心の知れた人と気楽に共同生活を送る住まいである。在宅介護・看護、通所介護等のサポートを得ることが出来れば、経済的合理性もあり地域における在宅居住の選択肢となり得る。

SSLを計画するに当たっては、若年層の共同居住とは異なる、自立高齢者による共同居住の特徴を把握する必要がある。そこで本研究では、まず仮想住み手としての自立高齢者グループによるワークショップ(以下、WS)を通して、理想とするSSLでの暮らしを描き、

SSLにおける共同居住の生活イメージ、共同生活のルールおよび空間要求、空間構成を把握する。次にそこからSSLを実現するための課題、空間要求からみた計画課題、さらに地域包括ケアシステムにおける住まいとしての可能性や意義を見出す。つまり、本研究はSSL実現に向けたシミュレーションである。

現在、自助・互助を前提とした高齢者の共同居住に関する実践や研究は少ない。そのような中で関連する研究として、高齢者グループリビングの先駆的事例である「自立と共生」を理念としたCOCO 湘南台(新築・共同住宅タイプ・NPO法人運営)の運営システムや15年間の居住者と暮らしの変遷を追跡した研究¹⁾、高齢者の安定的居住を目指したまちづくり活動の一環として、栃木県黒羽町における地元民参加のWSを通して、拠点整備の中でコミュニティスペースや託老所などとともに高齢者グループリビング実現に向けてケーススタディ(既存店舗と離れ等の改修)を行った実践的研究²⁾がある。

これらに対して本研究では、自助・互助を前提とした自立高齢者の意向に沿った共同居住の在り方を探る。共同居住に何を期待し、抵抗を示すかを、自立高齢者グループのWSから明らかにした上で、在宅に関する住まいの選択肢の一つとして、SSLという新たな共同居住の可能性を検討するところに特徴がある。尚、「高齢者グループリビング」と「高齢者シェアードリビング」との相違は運営主体にある。前者は法人等住み手以外の組織であり、後者は住み手自身である。

2. 研究方法

主な研究方法は、仮想住み手の参加による実践的WSである。参加者の概要と進め方を表1にまとめる。WS参加の高齢者グループは、住宅ストック活用を想定した人数(4名程度)、性別(女性のみ・男性のみ・混成)、既成の人間関係・付合い(仲間での居住を想定)を視点にして選定した4グループ15名である。WSは「SSLに対する期待と不

¹⁾ 大阪市立大学大学院工学研究科 准教授・博士(工学)
(〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138)

²⁾ 大阪市立大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)

¹⁾ Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City Univ., Dr. Eng.

²⁾ Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City Univ., Dr. Eng.

安の抽出」「理想のSSLの生活・住まいの具体化」「理想のSSLの深化」「振り返り」というステップで進めた。大阪市立大学大学院工学研究科学生をファシリテーターとして、2013年8月～2014年1月の期間に各グループ2回または3回(各3時間前後)実施した。尚、参加者には事前にWSの目的や当日の進め方等をまとめた資料を配布した。

Aグループでは、30年来の近所づきあいを有する女性3名により3回のWSが行われた。お互いの生活状況等をよく理解しており、またSSLを想定する既存住宅において実施したこともあり、他に比してより具体的な生活像が描かれた。Bグループでは、同じNPOで活動する男女4名により3回のWSと補足の個別ヒアリングが行われた。女性2名の意向を酌みつつも男性2名がリードする形でSSL像が描かれていった。Cグループでは、趣味の仲間である女性4名により2回のWSと補足の個別ヒアリングが行われた。参加者それぞれの意向を調整しつつSSL像が描かれていった。Dグループでは、地域活動の仲間である男性4名により2回のWSが行われた。2回目は、もしもの時を想定するために介護経験者の話が聞きたいとの要望に即して、男性1名・女性1名が加わり討論を行った。

各参加者は、現在の住まい・家族・生活を前提として参加しており、ファシリテーターは、SSLに対する期待・不安、理想の生活等に関して参加者の自由闊達な意見を聴取し、空間要求や住まい方の意向を整理した上で、理想のSSLの平面ダイアグラムを提案した。尚、各

グループや参加者の属性等の設定は、多様な空間要求や住まい方を抽出することが主な目的であり、属性との対応関係から分析することに主眼をおいたものではない。以下、表2～表5はWSにおける参加者の発言内容一覧であり、文中の[番号]は表中のものと対応する。

3. 自立高齢者の今後の住まいへの意識

(1) 高齢者施設に対する意識

自立高齢者は老後の生活を子どもに頼ることに強い抵抗を感じており、出来ることなら独立して家族を構えている子どもに頼ることなく、最後まで自力で生活することを望んでいる[01]。高齢者施設は最終手段であり、自力での生活に限界を感じた場合にしかたなく行く場所として捉えている[02]。高齢者施設への抵抗は、主に受動的な生活への抵抗である。過度に安全が優先され、食事や窓の開け閉めまでもが制限されたつまらない生活といったイメージを抱き[03]、制限された暮らしによるボケの懸念やそのような状態になっても尊厳ある扱いが望めるのかといった懸念がみられた[04]。

(2) 高齢者としての意識

WS参加者は活発な前期高齢者であり、日常的に健康に気を配っている[05]。配偶者のいる男性は、老化を切実な問題としてとらえていないが、徐々にできないことが増える不安も実感している[06・07]。

(3) SSLの捉え方

初回のWSにおける共同居住の説明やテレビで観たシェアハウスの情報から、当初B・C・DグループではSSLの共同居住は、柔軟性のある若者の一時的な住まいとして捉えられた[08・09]。一方、長屋居住者を含むAグループでは、長屋の相隣関係との類似性から共同居住は肯定的に捉えられた[10]。しかし、WSが進行するに従って各グループで、SSLは単身となった後のある程度の期間、気心の知れた人と気軽に共同生活を送るための住まい、という認識に至った[53]。

以上のように、近い将来の生活や住まいにおける自立と老化の両立に不安を抱えているものの、高齢者施設への入居にも抵抗を感じている自立志向の高齢者には、自助・互助を前提とした自宅と施設との中間的なSSLの提案は、新たな選択肢になると考えられる。

4. SSLでの共同居住と共同生活のルール

WS参加者が描き出すSSLでの暮らし、そこでの不安・期待・課題、共同生活を成立させるためのルールをみていく。

4.1 SSLへの移行段階の課題

(1) SSLにおける同居人

各グループの参加者は、SSLへ一緒に入居することを想定した気心

表1 WS参加者概要とWSの進め方

	Aグループ				Bグループ				Cグループ				Dグループ					
参加者	Aa	Ab	Ac		Ba	Bb	Bc	Bd		Ca	Cb	Cc	Cd		Da	Db	Dc	Dd
年齢	56	71	66		66	68	66	66		63	65	67	64		68	68	68	61
性別	女	女	女		男	男	女	女		女	女	女	女		男	男	男	男
現職業	教師	無職	無職		不動産	無職	無職	無職		無職	自営業	無職	無職		無職	無職	自営業	無職
前職業	教師	無職	薬剤師		不動産	会社員	ヘルパー	無職		無職	自営業	無職	無職		技術職	事務職	自営業	銀行員
配偶者	有	無	有		無	有	有	有		有	有	有	有		有	有	有	有
現住居	持家	持家	持家		持家	持家	持家	持家		借家	持家	持家	持家		持家	持家	持家	持家
趣味	園芸	散歩	テニス		飲酒	テニス	ウォーキング	ボランティア		テニス	フラワーアレンジ	手芸	ウォーキング		ボランティ	写真	仕事	新聞
関係	近隣関係				NPO					テニス					地域同好会			
					ボランティア					習い事								
					飲み仲間					地域見守り					高校同窓生			

WSの進め方																
期待・不安抽出	4 1回目 H目				2 1回目 H目				2 1回目 H目				3 1回目 H目			
理想SSL具体化	2 2回目 H目				2 2回目 H目				2 2回目 H目				3 2回目 H目			
理想SSL深化	4 3回目 H目				2 3回目 H目				2 2回目 H目				3 2回目 H目			
振り返り	4 3回目 H目				2 3回目 H目				2 2回目 H目				3 2回目 H目			
WS会場	参加者の自宅				NPO事務局				カフェ				ケアハウス・カフェ			

表2 WSにおける発言一覧(1)

※各発言末尾の④⑤⑥⑦は、発言者の参加グループを示す。(以下同じ)

3. 自立高齢者の今後の住まいへの意識	4. SSLでの共同居住と共同生活のルール	※各発言末尾の④⑤⑥⑦は、発言者の参加グループを示す。(以下同じ)
<p>■SSLへの移行段階の課題</p> <p>[01]「子ども同居しない」独りになっても、娘と一緒に住みたいかって言われたら、出来ひんかもしんからね④</p> <p>[02]「施設は最終手段」全然身体が動かなくなつて、入りたくないけど、入らざるを得なくなるわけ。④</p> <p>[03]「制限された生活」食中毒が怖いからお刺身類と握り寿司は出ないって。⑥</p> <p>[04]「尊厳ある扱いされない」A棟の何々さん、人格もへつたくれもありません。「はい、口開けて」とか尊厳もない⑤</p> <p>[05]「健康への配慮」毎朝ラジオ体操を続けているの。旅行に行ってもホテルでもするのよ、欠かさず。⑥</p> <p>[06]「当事者意識なし」(独居老人という)当事者意識がないから。何とかかなっていつのが本音。⑥</p> <p>[07]「出来ることが増えること」若い時はそれ分かれへんのですよ、70近くになって分かってきたわ。⑥</p> <p>[08]「若者の柔軟性」若い人たちは(同居人に合わせる)柔軟性があるから出来ることやけど。④</p> <p>[09]「若者の一時的住まい」若者は一時的な住処やからね。(高齢者の)終の棲家との違いやね。⑥</p> <p>[10]「長屋との類似」SSLでなくても、うちみたいな長屋やったら、独居老人でも(楽しく生活)出来るんや④</p>	<p>■SSLへの移行段階の課題</p> <p>[11]「夫婦同居否定的」夫婦と単身のSSL、無理やと思う。邪魔やね男は、気を遣うよ。私がお父さんに気を遣う④</p> <p>[12]「同じ価値観」ある程度条件、価値観が一緒のひとと住みたい。揉め事が心配。⑥</p> <p>[13]「男性の否定的」女性は馴染みやすいけど、男性は難しいわよね。男性のSSLは大変でしょうね⑥</p> <p>[14]「最適規模」4人はかなわん、6～8人で男女半々。自分も影響できるけど、自分も影響される。無理がない⑥</p> <p>[15]「多様なSL」こっちは高齢者SLで、隣は学生SLやったらすごいいいよね、いざという時に。もう一つはシングルマザーのお家とか、ちょっと子どもさん見てあげるとか⑥</p> <p>[16]「新天地の不安」住み慣れたところが一番、それを知らないところにボンッと集まるといのは難しいでしょ④</p> <p>[17]「所有物処分の不安」我々どうも、家に対する執着がものすごいあるです。それをバナーでなしにするのはかなり勇気がいる⑥</p> <p>[18]「新たな生活への不安」今まで培ってきた個性を共有できるか心配。⑥</p> <p>[19]「対応策」1ヶ月位やってみたらどんなやろね。試用期間っていうのが必要やと思うな。同棲みたいなの④</p>	<p>[20]「同上」高齢者になったらサポートが必要。サポーターみたいな仕組みをつくっておくことが必要やと思う。⑥</p> <p>[21]「持家負担」あの大きな家嫌やなって思うの。お金が要るのよ。定年退職して収入が決まってしまうと大変④</p> <p>[22]「維持費負担」修理する時は出さう？ そういのが難しいね。ガラス割ったら私が払うんやろか？④</p> <p>[23]「所有者が先に亡くなったら」その土地の所有者(住み手の一人)が亡くなったら、相続ってのが出てくる⑥</p> <p>[24]「近所付き合い」嫌がれないだろうか。家族が住んでいる中にボツとね、嫌がれない付き合い方をしないといけないでしょうね④</p> <p>[25]「地域参加」難しいよね、年寄りばっかりの家って。ゴミも出さないといけないし、自治会にも出ないよね④</p> <p>[26]「地域貢献」動ける間は役に立てたに楽しい。道に花植えるとか、子どもが学校行くとき危ないよとか④</p> <p>[27]「積極的」ご近所に声を掛けて、お茶のみに来ませんか。オープンカフェというか、そういう交流があれば、何かあった時に助けてもらえる。買い物の子どもの面倒みまますよとかね。そうやって近所に対してPRできる。⑥</p> <p>[28]「挨拶程度」ご近所さんとの関わりは、あまりこだわらないですが、遠くの身より近くの他人さんと立ち入らずに話す。挨拶が出来る程度がいいね。⑥</p>

の知れた者同士であるが、共同居住に関する議論が進む中で、SSL に適応し易い住み手あるいは住み手集団について議論が展開した。

現在の家族が前提であるが、配偶者との SSL への入居には否定的な意見が多い(夫に気を遣うことになる妻が拒否)[11]。SSL の同居人は同じ価値観を持つ住み手が望まれる[12]。性別では、コミュニケーション能力に劣るとされる男性のみの SSL には否定的な意見が多い[13]。また、関係が固定されず、かつ個が埋没しない 6~8 人程度の人数規模が理想という意見も出た[14]。同居ではないが、高齢者の力仕事を学生が手伝い、シングルマザーの子どもを高齢者が見守るというように、サポートし合えるような組み合わせの SSL を隣接させる提案もなされた[15]。

(2) SSL への移行の不安

高齢者は住み替えにあたって様々な不安を持つ。住み慣れた地域社会を離れて、新たな場で地域との関係を再構築する不安[16]、様々な思いや思い出が詰まった家やアルバム・収集物などの物品を手放す不安[17]、あるいは未知の共同生活への適応性に対する不安である[18]。それに対して、本格的な住み替え前の一時的居住試行や第三者によるサポートの仕組みが住み手から提案されている[19・20]。

(3) SSL 移行後の現在の持家の扱い

参加者毎の現在の家族や住宅事情により、そのまま維持、子どもに相続、売却と対応は様々である。前述した家への愛着・執着や手放してしまったら居る場所がなくなる不安がある一方で、その維持管理を負担に感じてもある[21]。SSL を終の棲家とするか、一時的な住まいとするかによって方針が変わる。また、住み手のひとりの持家を活用する場合の建物維持経費の負担や家賃の決め方[22]、所有者が先に亡くなった時の対応など検討すべき課題も指摘された[23]。

(4) 地域とのつながり

高齢者のみの SSL は地域から異質の存在と見られるという懸念は、各グループ共通しており、緊急時のサポートといったセーフティネットとしての近隣との関わりの必要性を認識している[24]。しかし、関わり方については異なる。それぞれ同じ地域に暮らす参加者が地元に住み続けることを希望する A・D グループは、地域活動や行事への参加を当然のことと考える[25]。さらに A グループでは、通行人の目を楽しませるために道路沿いに花を植えることや子どもたちへの声掛けも考えている[26]。利便性優先で新たな地で住み始めることを希望する B・C グループは対応が異なる。B グループは、地域行事の参加はもちろんのこと、さらに LDK や庭をオープンカフェとして開放し、近隣との交流をより積極的に促進しようと考えている[27]。一方、C グループは挨拶程度の付き合いでよいとしている[28]。

4.2 SSL における生活への期待

SSL における生活への期待から、気心の知れた仲間との互助や共同生活の有効性・必要性を探る。

(1) 独り住まいの不安解消

各グループで共通する共同生活のメリットは、独り住まいの不安解消である。病気のような緊急時の手助けはもちろん心強いが[29]、日常のちょっとした孤独感や不安を感じた時[30]、あるいは夜遅く帰って来た時等も誰かが居るだけで安心感を得ることが出来る[31]。

(2) 日常生活における楽しみ

「おしゃべりは SSL でなくても出来るが、同居ならばいつでも気軽に楽しめる④」「お洒落のアドバイスしてもらえろ⑤」「4 人ならば魚をさばいて食べることができる⑥」「独りよりもお茶や食事がおいしい⑦」「俳句と写真、互いの趣味のコラボ⑧」。一つ一つは日常の小さなことであるが、独居では味わうことのできない楽しみである。

(3) 生活に張り合い

食事をつくる、季節ごとの行事を行う、ウォーキングをする等は、独り暮らしでは張り合いがなく、惰性になったり、継続しなかったりしがちであるが、喜んでくれたり、ともに実行してくれる同居人が居ればより積極的に取り組むことが出来る[32~34]。

(4) 新たな出会い

自立志向の高齢者は好奇心旺盛である。共同生活に対して不安がある一方で、お互いの趣味や特技を教え合うなど新たな出会いや新たな知識の吸収、新たな学びに対して大いに期待する[35]。

(5) モノや機能の共有

独り住まいなら持て余しても、SSL ならば導入可能となる憧れのものや機能がある。ゆったりしたお風呂、バーコーナー、ビデオシアター、リビングの暖炉や庭のピザ窯などである。このようなものや機能が SSL における個人生活や共同生活を豊かにする。[36・37]

4.3 生活上の取り決め

SSL において共同生活を送るためには一定のルールが必要になる。各グループのルールに対する考え方をみていく。

(1) 共同生活

日々の三度の食事は生活リズムを形成する基準となる。30 年来の近所づきあいを有する A グループでは、食事は当番制であるが[38]、他のグループでは、長い生活習慣で身についたリズムや好みを簡単に他人に合わせることはできないので、食事については基本的には個人で準備することにしておき、共食については生活しながら調整するとしている[39]。特に D グループは SSL 外の社会活動優先で当初は共同生活を最小限とする[40]。共食の仕組みはお互いの生活リズムや好みといった情報を探りながら徐々に形成されると考えられる。

共用部の掃除は当番制、洗濯は各自でというのは各グループで概ね共通する[41・42]。また、病気等の緊急時の対応やその他は、事前に決めなくても自然発生的にルールが出来てくると考えており[43]、共同生活のルールも柔軟に決めていけばよいとしている[44・45]。

(2) 個の尊重

個室の鍵の要・不要は人毎に異なる。しかし、入室の際には「声を

表 3 WS における発言一覧(2)

■SSL における生活への期待 [29]【病気の不安】病気の時はもちろん皆でお世話をします。病気の時が一番シヤアしてたら心強いと思う。⑤ [30]【漠然と不安】寂しいですもん、明日目を覚ますやろかって。⑥ [31]【不安解消】帰ってきて家が明るいのがいいよな。夜遅く帰って来たときとか、SSL やったら誰か居ますもんね。⑥ [32]【張り合い】皆に喜んでもらえる料理を作れるように、男の料理教室、行くでしょうね。⑥ [33]【同上】十五夜、じゃあお月見しましょ。お団子作るのも 6 人居たらね。一人だとわざわざ作るのも面倒だし⑥ [34]【同上】散歩は駅からぐるって、一日 7,000 歩目指してる。毎日だと続かないから一緒にしよう。④	[35]【新たな出会い】新しい出会いがあるかも分らんね。その人の持っている経験とか吸収できるからね。⑥ [36]【憧れの機能】最高だね、暖炉なんかあったらね。その周りを囲ってビールでも飲もうかってね。⑥ [37]【同上】非日常的空间が欲しい、バーで飲むように⑥ ■生活上の取り決め [38]【食事は当番制】ご飯作るのは当番制にしよ。で、日曜なんかは買ってきてね、1 日ぐらいは自分勝手にね。④ [39]【ルールは少なく】生活のリズムって皆違うやろね。だから、要はルールは少なく、協働で食事当番をしたら⑥ [40]【最小限の共同生活】中を充実させなくてもね、この 4 人はね、外に出ていきたる、中でごそごそするよりも⑥	[41]【掃除・選択】共用スペースの掃除は当番制でいいんちゃう。気がついた人っていったら、気のつき方は個人差があるから⑥ [42]【同上】掃除は順番で、洗濯は自分のモノは自分で⑥ [43]【緊急時】誰か困っているとか、自然にルールが出来てきて、風邪ひいたらじゃあお粥さん炊いたらかってね。⑥ [44]【柔軟な対応】ルールはね、いくらでもね、その人たちの能力や生き方によって変えたらいいんやし。④ [45]【同上】大人が集まるとね、ぶっつけ本番やないけど、住み始めて自然にルールが出来てくるんやいいますか⑥ [46]【個室で】私しか知らん人やったら、個室やろね。④ [47]【共用部の占拠】勝手に友達よんでリビング占拠しちゃって、あのまたよんでるってね。それも困るね。⑤
--	--	--

掛けてから入る④」「必ずノックする⑤」は当然であり、「(部屋の行き来は)相手さん次第③」「(緊急時に)入る時も一人じゃなくって(複数で)④」との気遣いや、「リビングがあるから③」個別のコミュニケーションは共用部で、といった考え方もみられた。

(3) 来客対応

来客への対応は基本的には個室である[46]。人数によればLDKで対応することになるが、各グループ共通してLDKでの頻繁な来客対応は同居人の迷惑になるのではないかと懸念する[47]。また、「友人なら皆に紹介するが、身内だったら抵抗がある④」「家族が泊るのはビジネスホテル⑤」と、家族と友人とでは対応が異なる。

4.4 身体機能低下と居住の継続性

(1) 身体機能低下への対応

入居時は健康でも、時間とともに身体機能が低下することは否めず、住み手は不安に感じている[48]。風邪をひいた時のお粥や病院への付き添いなどのある程度のサポートはお互い様であるが、排泄が自身で出来なくなったら、あるいは認知症が発症したら互助は難しいのではないかと、というのが各グループに共通した認識である[49]。この場合、自分が自立生活できなくなった時の同居人への遠慮という意味もある。このような場合の対応を明確にすることが、SSL実現に向けての課題の一つである。

(2) 終の棲家としてのSSL

SSLを終の棲家とする場合、身体機能低下などライフステージに合わせたSSLを用意する必要があるといった考え方や[50]、お互い様なので、最後は迷惑を掛けることになってしまうが、同じSSLで看とるのがよいのではといった考え方も聞かれた[51]。しかし、介護保険を使って訪問介護サービスを受けても、寝たきりになれば同居人に迷惑を掛けてしまうので終の棲家とするのは難しく[52]、現時点では、SSLにおいて人生最後のある期間、独居するより楽しく過ごすことが大切、といった考え方が大勢である[53]。

高齢者介護は施設から地域へという流れになっているが、重度の要介護状態になった場合のSSLの位置づけはどうなるのか[54]、との問いかけも聞かれた。SSLを終の棲家とするための課題である。

(3) SSLの継続性

病気で入院した場合や身体機能の低下により家事分担が負担しきれなくなってきたら[55]、第3者のサポートの手を借りたり[56]、他の住み手で出来る限りフォローするが[57]、住み手のひとりが亡くなるあるいは健康上の理由等で退去となった場合でも、残った住み手はSSLの継続を希望する。入居者が減れば家賃等の負担が増えるために、速やかに新たな入居者を確保する必要がある。そのためには常に入居待ちの状態にしておかなければならない[58]。

5. SSLの生活イメージと空間要求

各スペースでの生活イメージ(誰と何を、どのように過ごす)を詳細に記述し、それを踏まえた空間要求を探る。

5.1 LDK

LDKは料理・食事・団欒など多くの活動が展開される場となるが、グループ毎の共同生活の考え方により空間のつくり方は大きく異なる。オープンカフェとして近隣開放を想定するBグループは、LDKを開放的かつ多人数利用を想定する[59]。日常生活においては、食事当番はルール化しないが、共同調理が可能となる[60]。A・Cグループでは大型テレビを設置する以外は、住み手や来客が食事やお茶をとるイス・テーブルの設置程度の要望である[61・62]。社会活動の比重が高いこれまでの生活の継続との考えのもと、共同生活は最小限で当初は孤食ベースとするDグループでは、ティータイムや晩酌で集まるLDのみで始めて、必要となればKを増築するという[63]。

また、趣味や行事の時間を共有することで、日常生活にメリハリや季節感が出来るとともに、SSLでの共同生活の欲びに繋がる。LDKでの生活を重視するA・Bグループでは、かつての楽しかった出来事を思い出したり、あるいは地域との繋がりのきっかけとしたりして、季節毎の行事の企画が次々と提案されている[64]。Dグループでは作品展示のギャラリーとして活用することが提案されている[65]。

LDK空間の在り方は、グループ毎の共同生活の考え方に对应して多様である。個の尊重に配慮しつつ、日常・非日常の使われ方に対応するLDK内の空間的連携・分離、さらには地域あるいは個室との空間的連携・分離が望まれる。

5.2 個室

(1) 自己実現の場

「ご飯食べる時はね(皆で)。けど、寝る時は1人で寝たいわ④」といった一般的なプライバシー確保だけでなく、在宅時間が長い高齢者にとっては、特に個室での生活を重視するC・Dグループでは「私はテレビ好きでCSやWOWWOWも③」「部屋のレイアウトは自分の好みで③」「わあ！ってポスター貼りたい③」「個室で好きな本を何回も読み返す⑤」「必ずペット(猫)を飼うこと⑤」…といった自己の趣味・嗜好を実現するためにも、他から干渉されずに好きなように設え、過ごすことが出来る完結性と独立性を持った個室計画が望まれる。広さは、C・Dグループでは10畳程度欲しいとの声が聞かれた[66]。

(2) 集団からの隔離スペース

同居人が居る安心感はSSLの大きなメリットであるが、何れのグループにおいても集団から離れて独りになりたいという要望が存在する。共同生活を重視するA・Bグループでは、気分転換等のための共同生活からの一時離脱であり[67]、Dグループでは独りになれるが孤立しないというSSLの個と共の両立を評価する[68]。Cグループでは個室での個人生活を主とする志向が強いので、集団からの離

表4 WSにおける発言一覧(3)

<p>■身体機能低下と居住の継続性</p> <p>[48]【健康面の不安】健康面がすごく心配。突然出てくる痴呆症、ばけ。もしかしら明日起きたら、記憶がさーっとなくなつてて、こういう場合シェアはどうなるのか不安④</p> <p>[49]【自立生活が条件】トイレと頭がしっかりして、ご飯も食べてが最低条件やね。認知症が入ってきて分担が出来なくなったら、シェアはね。ちょっとは助けてあげられるけどね、出来なくなったら無理かもね。最終的には施設④</p> <p>[50]【段階的SSL】元気な時のSSLと終末期をむかえた時では形態が違うはずやと、その人の居るライフステージに合わせないと。⑤</p> <p>[51]【SSLで看取り】よりよく死ぬことはよりよく看取ることやうかな。give & giveでいいんやうかな。SSLの中で死を見るのを分けたらあかね。次自分やからね。⑤</p>	<p>[52]【介護保険】ベッドに介護の人呼んだらいいんや。介護保険を使う。一人暮らしもSSLも一緒や。けど、寝たきりは(同居者に迷惑を掛けるから)無理ですね。④</p> <p>[53]【施設までの一時的住まい】SSL いうのも難しいね、とことん(介護)出来ないから。けど、ある程度っていうのが大事やね。このある程度の期間が楽しく幸せやったらそれはそれでいいんや。独りでずっと過ごすよりも楽しいことをしたっていうのは大事なことでしょ④</p> <p>[54]【地域包括ケア】施設から地域へとなつていくけど、身体が弱り切った時に最後訪問介護だけでは賄えないわね。福祉の最後をどうするか、ものすごく難しいわ。重度要介護になった時の高齢者 SSLの位置づけなんやけどね⑤</p> <p>[55]【入院前後の対応】もしもの時、誰かが体調を崩した時は病院に行ってもらひかないよね。(退院後)ここに帰ってこれるかなやね。④</p>	<p>(寝たきりになって)負担しきれなくなったら困るわね、けど帰るとこも無かったら困るわね。④</p> <p>[56]【第3者のサポート】SSL といっても全部自分たちでっていうのは限界があるからね。軌道に乗るにはいっぱい手助けしないと上手くいかないと思うのね。皆が意見を出せるようにするには第三者みたいな人がいないとね。時々「どーですかー」って、そんな人が必要なんやうかな④</p> <p>[57]【互助】(ルールは)基本は皆が守るってことやけど、それが段々できなくなってくる。それがちょっと心配やね。お掃除したいけどやり方が汚かったりゴミがあったりね。皆で(フォロー)していかないと⑤</p> <p>[58]【入居者確保】元気なうちはいいけど一人減り二人減りっていうのは寂しい。それこそ家賃どうするのって話になるもんね。(入居したい)人が居たら簡単やけど。⑤</p>
--	---	---

隔スペースとしてのニーズが最も高い[69]。

(3) 荷物の保管場所

SSL への住み替えを機に高齢者は所有物の整理を迫られる。いずれしなくてはならないことであるが、物への愛着や執着は個人毎に異なる。概ね「洋服や食器や本当に好きなモノだけを持って入る◎」と物の整理に前向きであるが、「(撮りためた)自分の写真集、捨てる勇気はまだない⑩」という意見もある。既存住宅活用の A グループは空き部屋を共用物入れにするとしており、他グループは個室に物入れの確保を希望し、その大きさは一畳程度で共通する[70]。個室への仏壇設置に関しても複数グループで要望があった[71]。

(4) 水廻りと個室の関係性

日常生活において個室で過ごす時間は、個室の LDK からの空間的分離や水廻り設備に対する要望に影響する。A グループでは、「主婦にとったらここ (LDK) が自分の部屋でね。自分の部屋 (個室) は寝る部屋」と LDK での生活が主であり、個室は寝室という認識である。B・C グループでは、個室の LDK との空間的・設備的 (戸別洗面・トイレ) な分離要求が出されている。B グループは、共用空間を地域に開放するためであり、個室に身繕いをするための洗面を備えるが、それ以上の充実個室への閉じ籠りを誘発し、SSL の意味がなくなると懸念する[72]。C グループは「自分の時間があって、それから皆でって…」と、独りでの生活を楽しむことに重きを置くためであり、各個室にトイレが設置され、共用トイレは来客用という位置づけである。D グループでは、当初は最低限の共用空間で始めるために、個室で生活が完結できるよう小さなキッチン・風呂・トイレが装備される。以上のように共同居住の考え方により、個室の設えが異なってくる。

高齢者の志向からみて、一人一室の個室は必須である。個室はこれまでの各自の私生活の継続性を維持する場、大切なモノの置場であり、各自の趣味・嗜好実現の場である。その一方で孤立を恐れ、同居人の存在により安心感を得ている。個の尊重と個-共の繋がりとの両者を求めるプライバシー意識は、若年層と異なり特徴的である。

6. 平面構成と住まいの特徴

ファシリテーターと共に各グループが描出した理想の SSL の平面ダイアグラムを図 1 にまとめる。尚、既存住宅の活用・非活用を含めて、住宅規模・立地等の設定は参加者に委ねた。A グループは強い地元志向から、3 軒のうち最も築年数が浅く、バリアフリー・オール電化と設備も整っている既存住宅を選んだ。他グループでは、子供へ財産として残したい、SSL に活用する住宅の持主が死んだ時にどうすべきか迷うくらいなら、という理由から仮想の賃貸住宅となった。①A グループ：30 年来の近所づきあいを有する女性 3 人による SSL である。既存の公私室型 (4LDK) の 2 階建て戸建住宅の活用である。個室の位置・向き・大きさが異なり、割り振りの過程で住み手それぞれの意向や健康状態が考慮され、余剰部屋は共用物入れに使う等の提案もなされた。既存住宅の活用は、機械的な平等とは異なり、住

み手との対応で具体的な共同生活像の描出が促される。

②B グループ：社会貢献に関して共通した考えを有する男女 4 人による SSL である。理想とする人数規模 5~7 名が暮らせる 2 階建て住宅を想定し、高齢者 4 名以外は困った時のサポートを期待して学生の入居を希望する。オープンカフェや子どもの見守りを目的に共用部を地域に開放する。LDK を玄関近くに設け、奥に個室を配置して個-共を分離するのは、共用部を地域に開放し易くする工夫である。③C グループ：多彩な趣味を有する女性 4 人による SSL である。各自の明確な意向を満足するには個別の個室計画が必要となる。日常生活の基本は個室での生活であるが、過度に孤立しないよう、個室にいても同居人の気配を感じられるように各個室は LDK に直結する。個の尊重と個-共の繋がりととの両立が強く求められる住まいである。

④D グループ：地元地域の活性化活動において協働する男性 4 人の SSL である。個室の独立性が最も高いが、閉じ籠るのではない。LDK を基盤にするのではなく、地域や社会での活動を基盤とするためである。コレクティブ住宅に近い住まいである。

平面ダイアグラムを比べると、LDK での共同生活や空間活用を重視する A・B グループは LDK と個室とが廊下・階段を介して繋がっており、個室での生活を重視する C・D グループは各個室が直接 LDK に接続している。A・B における個室は、LDK から距離を取り、重視する共同生活からの一時退避という役割を有し、C・D の空間構成は個人生活を大切にしつつも孤立を防ぐという機能を有する。SSL における空間構成と住み手の共同居住志向とは、一定の対応関係がみられる。

また、仮想借家の B・C・D グループでは、都市部の一般住宅の規模・設備に比して過大な要求となっている。特に個室において顕著であり、プライバシーを重視する高齢者意識の表れである。一般的に共同居住の住まいを計画する場合、個室計画が共用部に比して軽視されがちであるが、SSL の計画では個室計画も重視する必要がある。

7. まとめ

理想の SSL における暮らしと共同生活のルールから抽出された SSL 実現のために乗り越えなければならない課題とそれに対する方策、および空間要求について整理し、本研究のまとめとする。

(1) SSL を実現するための課題

日常生活での不安解消や新たな生活への期待から、SSL は自立高齢者から肯定的に評価されている。しかし、SSL を実現させるには乗り越えなければならない課題がある。一つは移行段階であり、環境移行や不動産処分など住み手に大きな決断を迫る場面がある。その決断に対する不安を緩和するためには、SSL での生活の魅力や優位性を伝達するための試行居住や建築・不動産専門家によるサポートが有効である。もう一つは終末段階であり、SSL が終の棲家となりうるか、介護は誰が担うのかという不安への対応である。この課題は住み手の自助・互助のみでは乗り越えることは困難であり、地域包括ケアシステムによるサポートを得ることが必要となる。

表 5 WS における発言一覧 (4)

5. SSL の生活イメージと空間要求 ■LDK [59]【開放的】流し台は L 字で、3・4 人並べる感じ。それくらいいいとね。一人でコトコトやってるのつまらないよね⑧ [60]【ルール化されない共食】ちょっと面倒くさいから 3 人分一緒に作ろうかというね。一人分やったら作らんけど、一緒に作るからね。カレーなんか僕好きやし。⑧ [61]【大型 TV】皆でサッカー観たり、それこそビデオシアター◎ [62]【テーブル・イスの設置】テーブルと椅子 4 つ。これやったらお客さん 3 人くらい来てでも大丈夫やね④	[63]【住みながら作る】必要になったらお金出し合ってやるかというね。最初から全部整えるんやなくて、必要な物から作っていく⑩ [64]【季節毎の行事の企画】お嬢さんだよりって。近くの子が来るんやったら、家の古いお人形さん持ってきて飾ってみようかって。⑩ [65]【ギャラリー】趣味は写真やから作品を毎月飾って皆に観てもらおう。自己満足やけど。⑩ ■個室 [66]【広さ】出来れば 10 畳位あればゆっくりできるかな。たまに子どもや孫がきても泊ってもらえる広さ◎ [67]【生活リズムのズレを調整】気楽に、「今日はしんどいから部屋メ	にいるー」って言えたいいいね。④ [68]【個と共の両立】独りで居たいけど不安もある、そこら辺が矛盾してるね。歳をとるということはそういうこと⑩ [69]【公私分離志向】ずっと目についているのは窮屈やね。独りでいる時に無理やり呼ばないで、話をしたくない時もある。◎ [70]【収納は一畳程度】一畳の押入れが必要。半畳の押入れがついてたかって、何にもならないもんね。⑧ [71]【仏壇置場】仏壇は、自分の部屋に小さいのを置きたいよね◎ [72]そうになったら (個室への) トイレ・ミニキッチン (装備)、部屋に閉じこもってるよね、多分。一緒に居るっていうだけで SSL にならないよね⑩
--	--	--

図 1 SSL の平面ダイアグラム一覧

入居後は、長い人生で一人一人の身についた暮らし方に伸張しつつ、最小限・自然発生的ルールに基づいた相互の折り合いや互助による安定した日常生活の形成が課題となる。また、セイフティネットとしての地域コミュニティへの参加も必要であり、そのためには良好な関係を有する気心の知れた人同士の地元での SSL は有効である。

(2) 多様な空間要求からみた計画課題

SSL の理想の空間イメージを比べると、個室-LDK の多様な関係性および個室への強い拘りが読み取れた。従って、規模が大きくても、伝統的な続間型住宅は SSL に不向きである。一方、nLDK 型住宅を活用して SSL を計画する場合も、プライバシーの尊重や個人生活の充実のために個室の大きさ・設えや部屋数は勿論のこと、それに加えて私室-公室の関係性に対する志向は一律ではないことを認識して、既存住宅の空間構成と住み手集団の共同居住の志向との適応を確認することも必要である。また、高齢者の共同居住は身体的機能の低下とともに自助から互助へ、場合によっては地域のサポートを受け入れての介護への対応が必要となってくる。空間の開放・閉鎖の選択可能性など、状況変化への空間的対応も必要となる。

以上の課題を乗り越え、SSL を地域包括ケアシステムの中で実現できれば、親しい同居人と住み慣れた地域において、自助・互助をベースとした「対人距離の近い共同生活」と「一人の生活」とを随時調整可能な暮らし、つまり独居にはない安心感とこれまでの生活の継続性を有する暮らしが可能となる。地域の人々にとってもサポート等

で SSL に関わることで、自分たちの老後の居住モデルとして認識することが出来る。このことは入居者の確保、つまり SSL の継続性に繋がる。SSL は、自宅のように排他的でなく、施設のように非主体的でもない、自宅と施設の中間的な住まいとしての可能性を有する。

最後に、WS にご参加頂き貴重な意見や考え方をお聞かせ頂いた方々に心から謝意を表します。また、本論文は上田真有佳氏の修士論文研究(2014 年 3 月修了)のデータを再分析したものである。

参考文献

- 1) 土井原奈津江、大江守之: 高齢者グループリビングの持続的運営に関する研究—先駆的事例 COCO 湘南台の 15 年の経験にもとづく考察—、日本建築学会計画系論文集、第 80 巻、第 715 号、2071-2079、2015 年 9 月
- 2) 園田眞理子、片倉直人: 黒羽における高齢者等の安定的居住に向けたまちづくり活動—既存建物の利用と高齢者グループリビングの実現に向けたケーススタディ—、日本建築学会技術報告集、第 22 号、369-372、2005 年 12 月

[2016 年 6 月 1 日原稿受理 2016 年 9 月 20 日採用決定]